

「謡と謡本」

場所 神戸女子大学古典芸能研究センター閲覧室／時間 午前十一時～午後四時三〇分

【解題】

1 堀池宗叱謡本 中本、四十七冊、九十四曲

折本仕立てで両面に一番ずつ収める。折本の表裏がともに表紙となる、謡本には珍しい装幀。表紙には紺地に金銀泥で曲に因んだ景物や人物が描かれ、左肩に金銀泥草花絵入り朱題簽あるいは朱無地題簽が貼られる。題簽の文字は、前者が近衛龍山筆、後者が後奈良院皇子曼殊院覚恕親王筆との極めを有し、龍山の筆は慶長期(十年迄)のものとして認定される。九十四曲中二十三曲に、「堀池宗叱(花押)」の署名がある。宗叱は、堀池宗活の父、堀池次介忠清。永祿から文禄期に活躍した京都の手猿楽者(素人の能役者)で、茶道も堪能であった。宗叱は還暦出家後の法名らしく、天正九年が初見。

2 元和頃筆観世黒雪自筆自章乱曲集 一卷

元和頃筆の乱曲集(能のうち曲舞の部分を抜き出した謡

3 伝鳥飼宗慶筆和歌色紙 一枚

本)。もと卷子本であるが、軸を失い、後半部分の料紙も欠く。金泥散らし、紙背に蔓牡丹紋の雲母刷を施す。料紙の端裏に後人の手によって「角倉素庵自筆」と極められているが、素庵の筆ではなく、素庵と同じく光悦流の書を能くした九世観世大夫観世黒雪の筆であるらしい。元和七年の観世黒雪自筆自章の謡本「芭蕉」一卷(黒田家伝来本。観世文庫蔵)と筆跡が酷似し、また料紙の寸法、装幀も同様で、本謡本もこれとほぼ同時期に調製されたものであろう。

整版車屋本を刊行した鳥飼宗 (後に道 と改名)は、書の鳥飼流の祖、鳥飼宗慶の高弟であり、車屋本の版下は宗自身の手になる。鳥飼宗慶が永祿三年に『書札礼法』(転写本が宮内庁書陵部に所蔵)を贈った「与十郎」は、宗の若名と推定されている。天正九年に金春喜勝から謡伝受目録(宝山寺蔵)を授けられた鳥飼与左衛門入道も、その本文筆跡から宗 とされており、宗 は謡本本文の筆写のみならず、金春流の謡伝受も行っていたことが知られている。

4 石田友雪筆「曲舞・願書・起請文」 一卷

寛永八年卯月に石田友雪斎安公が木曾願書・正尊起請文・小謡に節付して高野山吉福院へ進上した一卷。友雪は、観世身愛暮閑(黒雪)の高弟として『四座役者目録』に名が見える能書家。暮閑自筆版下の奥書を持つ元和卯月本の刊者である。鴻山文庫本の石田少左衛門友雪章句本は元和卯月本の底本と考えられている。石田少左衛門安公は、黒雪が没した寛永三年十二月の直後に出家し、友雪斎と号した。友雪の弟、松雪斎や継嗣の少左衛門盛直(松玄斎)も謡本の書写、節付を行っており、その名は延宝九年刊『西鶴大数』に「石田流其声雲に響して」と詠み込まれるほど、上掛りの素謡教授者として一世を風靡していた。

5 八十島道除筆「今川之壁書」 一卷

御家流の能筆として知られる八十島道除は、もと石田三成の家臣で、後、藤堂高虎に仕え、右筆や伽役などを勤めた。寛永元年の没(『公室年譜略』)。観世黒雪節付保田甚兵衛宛謡本(観世文庫蔵)など、謡本もいくつか書写している。「今川之壁書」は南北朝・室町期の武将今川貞世が後嗣の仲秋に政治の要道を説いたもので、近世には書の手本として用いられた。本資料は藤・松・鹿・竹など、光悦謡本とモチーフを共有する雲母刷模様の色替わり料紙を用いている。道除の筆蹟には他に田中源次郎宛「今川壁書」(帖装本)、慶長十年十一月付秋田実季宛「琵琶行」などがあり、

これらにも同じく雲母刷模様の料紙が用いられている。特に慶長十年の年記がある後者は、雲母刷料紙装飾の製作使用年代を特定する上で重要な資料であり、光悦謡本の刊行年代を推定する参考材料ともなりうる。

6 江戸初期筆無章句未装本「養老」 一帖

江戸初期筆の一番本。表紙はなく、紙裁も未了。本文は光悦流の能筆の手になるが、筆者不明。本謡本の離れである三十帖の謡本(京都国立博物館保管)には、畳紙に「光悦肉筆謡本／三拾冊」とあり、三十帖のうち、「やしま」「はん女」「舟ハシ」に節付がある。その節付は寛永・正保期の黒雪・重成の節付と類似し、本謡本も寛永・正保期に書写されたものか。

7 江戸初期筆無章句紺表紙中本 十帖

「西行桜」「三わ」「かぬたん」「もみちかり」「松風」「うねめ」「楊きひ」「三井寺」「ていか」「をミなへし」江戸初期筆の一番綴帖装本。紺表紙には、曲の内容にちなんだ金銀泥絵が描かれる。節付はなく、流儀不明だが、詞章は上掛り系の本文。慶長・元和頃の筆か。戦国期から江戸初期の筆写謡本には、本謡本のように金銀泥絵の紺表紙を付すものが多い。

8 室町末期写下掛謡本 一番綴、中本、五十冊

退紅色表紙。綴葉装。表紙には緑青色と金泥で草花、鳥、貝類など数種の絵が描かれるが、曲の内容には関連しない。本文の筆者(複数)、節付者は不明。「しほり」など下掛り特有の用語も見られる節付ながら、役名表記は「わき」のほか「シテ」という表記も見られる。「高砂」のみ朱入り、上掛りの節を直して入れたものか。また、役の交代を示す鉤印は節付後の後筆らしい。

9 江戸初期写観世流謡本 一番綴、半紙本、九十八冊

本文筆者(数筆か)、節付者ともに不明。施譜は観世大夫黒雪風で、本文・施譜などはしかるべき証本によるらしい。紺無地表紙の半紙本で、全体的に石田友雪本が想起される雰囲気を持つ。また、揃本(もとは百番か)に調整しながらも署名・奥書等を欠くのは、注文を前提に制作された商品的工房作品を思わせる。本文は基本的に上掛りの古版本(光悦本・玉屋本・擬光悦本・元和卯月本)の範囲で、かつ特定の一つには限らない。元和卯月本とは、何冊かの題簽の文字が酷似していたり、元和卯月本に含まれない十五曲(「項羽・吉野静・谷行・松虫・小督・朝顔・猩々・鍾馗・張良・籠太鼓・熊坂・羽衣・道成寺・弓八幡・経政」)のすべてに朱筆の書入れがあるなど、何らかの関わりのある可能性もうかがえるが、影響関係は未詳。なお、元和卯月本所収曲のうち、「右近・善知鳥・大原御幸・景清・小袖曾我・桜

川・白髭・龍田・玉井・竹生島・唐船・鶴・野宮・花筐・氷室・富士太鼓・夜討曾我」の十七番は本書には含まれない。

10 江戸期写光悦本仕立謡本

光悦謡本(展示11・12)の装幀を真似て仕立てられた謡本。本文は江戸後期の書写か。観世流系統の詞章ながら光悦本自体の写しではない。近江長浜の吉田家旧蔵本の中の二冊。同家には、上掛り番外五百番の謡本や、塩小路光貫筆の仕舞附なども伝わっている。

11 光悦謡本「皇帝」
12 光悦謡本「定家」

慶長・元和年間に、古(木)活字版で出版された豪華な装幀の謡本。贅沢な紙を用い、表紙や料紙に俵屋宗達の図案とされる雲母文様を刷り込むなど、書体・料紙・意匠のすべてにわたる豪華本として珍重されてきた。本文が光悦流書体なので「光悦謡本」と通称しているが、江戸初期刊行の観世流主要謡本の一つ。本文は、室町時代の謡本から江戸時代の主流となる元和卯月本(展示13)系統への移行する様を示しており、近世初期の観世流の謡の様子がうかがわれる。なお、光悦謡本は、装幀や活字の違いから表章氏によって十数種類に分類されている。展示11は上製本(光悦本各種の

中で最初に刊行されたと思われる)、綴葉装、香色大蔦雲母模様表紙。展示12は袋綴並製乙種本。薄灰色唐草米字印摺文(甲)雲母模様表紙。

元和六年刊観世流謡本(複製) 一番綴、半紙本、百冊

元和六年卯月の観世大夫の奥付を有し、「元和卯月本」または「卯月本」と通称される。刊期を明記した最初の謡本であり、観世大夫の関与が明白な、観世流では初めての整版謡本。綴帖装の大形半紙本。曲の内容に因んだ金泥絵入り紺表紙。ただし絵柄は伝本により異なる(本書底本は横山重氏蔵本)。本文書体は近衛流の達筆という豪華な装幀で、光悦謡本帖装本とともに版行謡本の双壁とされる。各冊に、「右百番之本者我等直／伝石田少左衛門章句付／依決板起猶以令清書／加奥書畢／元和六年卯月日／観世左近大夫暮閑(花押)」という暮閑自筆を版下にしたと見られる奥付があり、高弟石田少左衛門友雪が章句(節付)を加え、暮閑の校閲(奥付識語の「清書」は校閲・加筆の意)を経て刊行した旨が記される。詞章は、暮閑の時代、慶長期以来に進行した観世流謡曲詞章の改訂最終形態ともいうべき内容で、天正末年頃の写本の詞章とはかなり異なる。大夫公認本ゆえに権威を認められたらしく、本書の詞章はほぼそのまま寛永卯月本(展示14)に踏襲され、江戸前期に版行された観世流謡本の多くは観世黒雪章句の正本によったことをうたっている。

寛永六年刊観世流謡本 五番綴、半紙本

通称「寛永卯月本」様々な版が確認されているが、すべて半紙本で奥付に「右百番之本者観世左近／入道暮閑章句付令加／奥書之本写之畢／寛永六年／卯月日」とあり、刊者名は記されない。本文の字体は近衛流、片面七行で、間拍子なし、内題なしという版式もすべて同一。奥付にいう観世入道奥書の本とは「元和卯月本」(展示13)のことで、全百番の曲名も一致し書体も似ており、詞章もほぼ同じ(一部、元和卯月本の不備を訂正した箇所あり)。刊行の前後を確定しがたい覆刻関係の本が多いが、慶安頃まで数人の刊者によって版が重ねられて広く流布し、元和卯月本系の本文が観世流謡本の主流を占めるに至った要因となった。

寛永十年刊上掛り五番綴謡本 小本、二十冊

浅黄色表紙、中央横型色替刷題簽。異書体で片面六行、直し間拍子なしという古風な版式。奥付には「右百番謡本観世左近大夫章句以有之令開板者也」とあるが、観世流とは判断し難い。本書の所収演目は他に類例の無い編成で、一般には収録されない番外謡をも含んでいる。早稲田大学演劇博物館安田文庫には、本書と同版で無刊記の本(特製本)があるが、冊毎の編成は本書と全く異なり、百番全体でも相互に二十六曲の出入りが認められる。このことは、五番綴百番の編成を顧客の求めに応じて自由に組み替えることが可能な形の刊行であったことを推測させる。

16 元和元年西森六兵衛政春・

吉田徳兵衛満正刊下掛り謡本 五番綴、半紙本

刊者兩人の名の一字ずつをとって通称「六徳本」。江戸期下掛り謡本の中でも特異な位置を占める本で、明治四十年に刊行された金春流謡本の元となった。奥付には「世間書弄之謡家々之伝来區別也依之所信之童子多憾章曲訛謬耳余自／癸歳雖志此曲調文字開合音響清濁／未分明此等之趣且夕窺歌曲之門戸／考多々之章句令開板者也尚有脱漏／魯之誤者后学之風流士請改正之焉／(年紀・兩人連名)」とある。本文は、下掛り最古の版本である車屋本(鳥飼道晰刊、展示3参照。)の系統ではなく、金春大夫の系統の詞章。本文書体は、観世流謡本に似せて近衛流、間拍子はヤヲハ・ヤア式のほかに「内ノ拍子・内ヤヲハ・内ヤヲ・内ヤア」を用い、強吟と弱吟の別を「弓・禾」の略号で示すなど、節付を詳細にしている。

18・19 刊年不明木田七兵衛刊進藤流謡本

五番綴、中本、二十冊、百番

奥付に「右百番之謡本者 進藤久右衛門尉以章句 正本写之者也 木田七兵衛開板 押小路通竹屋町有之」という。寛永期に刊行されたものか。間拍子なし。表紙左肩に横長書題簽、地小口に漢字一字で曲名を朱書する。独自の組合わせを持つ新出本。進藤流は、観世座付きの脇方で、寛永十二年に八十三歳で没した進藤久右衛門忠次を流祖とする。進藤流の謡本は、江戸初期には観世流に次いで数多く刊行された。進藤流謡本相互の間には目立つ相違がなく、最初の木田本の詞章がほぼ踏襲されたらしい。元和卯月本風の節付け体系確立以前の、過渡期の観世座の詞章を伝えるとされる詞章は、観世流謡本と大差はないが、節付に「入」を使用するなど、概して光悦謡本に近い。進藤流の外組刊本は現在のところ確認されていない。19は別組の一冊。

17 江戸前期筆進藤流紺表紙中本「清重」 一帖

江戸前期筆の一番綴帖装本。奥書がなく、筆者・節付者は不明だが、節付には「シテ」を「シラ」と表記するなど、進藤流の節付の特徴が確認できる。進藤流は桃山期から江戸初期に活躍した進藤久右衛門忠次(寛永十二年没。1の堀池宗叱の弟子)を流祖とする脇方の流儀。江戸前期には京都を中心に進藤流の謡が盛んで、版本も多く出版された。

20 寛文十年恵賢刊観世流謡本(服部宗碩手沢本)

五番綴、大本、十九冊(第一冊欠)

寛文十年恵賢版の初刷。各巻末に服部宗碩の署名と「流木軒盛信」の朱印があり、服部宗碩こと福王盛信(宗碩は隠居名)の手沢本。本文九行。本センター蔵全十九冊のうち、題簽付き十二冊。表紙は香色で下段に花紋亀甲空押。萌黄地金草花模様切箔散好題簽に曲名墨書。題簽も宗碩自筆か。『鴻山文庫本の研究』による分類内組C版の別装本。本文

も朱筆にて章句語句の訂正挿入を施す。奥付に「右之謡改板／京四条坊門通御幸町／寛文十庚戌九月吉日（「惠賢」黒印）」とあるように、新たな版下を書き下ろした新刊。書体は明暦外組本に酷似し、百番の曲名は五番綴の組合わせは異なるが、元和卯月本（展示¹³）と同じ。また初めて内題が入るなど、本書に基づく一部改訂本が貞享頃まで観世流謡本の主流を占めた。

福王盛信（一六六〇〜一七二二）は、五代盛親宗巴の子で、幼名新之助。父宗巴が延宝元年に没する以前に養子盛仍（同腹の兄）に六代を継がせたが、盛仍が多病で延宝八年に没したため、二十一歳の時に七代を継いだ。元禄十六年正月二十二日に徒歌の会を東山双林寺に行うなど盛んに活動した。宝永七年入道して宗碩を名乗る。正徳五年（五十六歳）、仙洞御所に召されて関寺小町の徒歌を歌った。享保六年没、六十二歳。

平松家旧蔵福王流番外謡曲八百十番本

五番綴・十番綴、半紙本、六十七冊

四百番・五百番は五番綴、六百番以降は十番綴。本来は八百番までの計七十冊と、新曲十番の一冊、外題揃の一冊で八百十番の揃いであつたらしい（五冊欠）。四百番本は山藍摺蜀江錦艶出表紙、五百番本は青白椽布目表紙、六百番、七百番本は紺色流水寿文空押表紙、八百番本は黄椽布目表紙。謡本のほかに「板外外題揃 八百十番」紺表紙一冊。奥付に「当家伝りの写本有之トいへ共 天明八戌申年京宇土火災之節散乱 抛之今般改令書写者也 文政十一年子九月

平松善右衛門 行年六十五歳 信尚（花押）」とある。平松善右衛門は、『福氏門人録』にも名前の見える享保以来の福王家門人で、同門の平岡八郎右衛門とともに、素人ながら十一世茂十郎盛充当時の福王流を支えた存在であつた。平岡家は、十世盛世時代の寛政元年（一七八九）には、当代の八郎右衛門直敬が一代に限り福王の苗字を名乗ることを許されたほどの実力者で、この家もまた、本書と同様の八百番本を蔵していた（吉田幸一氏旧蔵「八百番謡本」、現関西大学蔵）。

（参考展示）「福王流昭和正本」 一番綴、半紙本

江戸期に長きにわたつて関西の素謡の中心であつたにも関わらず、従来「ついに自流の謡本を刊行しなかつた」とされてきた福王流の名を冠した謡本。薄茶色無地表紙に、獅子丸型押し。本文七行。一丁表に曲の梗概、裏に曲柄等の一覧表を付す。奥付は年月日以外はすべて同じく「昭和二十八年六月十五日発行／改訂著作者 十五世 福王茂十郎／印刷所 大阪市西区江戸堀上通二丁目四十三番地 福田堂印刷所／印刷者 大阪市西区江戸堀上通二丁目四十三番地 沼博一／発行所 大阪市東区平野町一丁目十五番地 福王刊行会（田村）のように記す。印刷者の沼博一は、印刷業を家業としていた能楽評論家の沼艸雨（^{ぬまそうら}一九〇六一九九二）の本名。展示書はいずれも一番綴。「大蛇」「吉野天人」なども含まれているが、現行全曲分が刊行されたかどうかは不明。

23 万治二年山本長兵衛刊頭注入謡本

五番綴、大本、二十冊（二冊欠）

紺無地表紙。紙面一杯に輪郭をとり、上部二寸ほどの欄に字句の注釈を施し、下部に御家流の本文を掲げる新形式の謡本。頭注入りも本文八行という構成も、以後に例がない。辞解は必ずしも『謡抄』の引き写しばかりではないので、出版した山本長兵衛（山長）の企画によって新たな辞解が試みられたものか。本書は山長が初めて刊行した謡本。以後、江戸末期に、現在の檜書店に版權を引き継がれるまで、山長は観世流謡本刊行の中心的役割を担った（展示25参照）。

24 （参考展示）慶応末・明治初年頃山本長兵衛・

橋本常祐刊一番綴本 一冊

幕末に版權の一部を買得した橋本常祐（檜書店の前身）が山本長兵衛とともに出版した一番綴小本。近江屋（小西）徳之助旧蔵本。奥付には正徳三年の刊記があるが、実際に刊行されたのは慶応末年か明治初年。山本長兵衛は明治になつて廃業し、以後は山本から版權を引き継いだ橋本常祐とその子孫が観世流謡本を出版した。

25 正徳六年弥生山本長兵衛刊観世流謡本

五番綴、半紙本、二十二冊

26

明和二年出雲路和泉掾刊観世流謡本（明和改正謡本）

大本

内組揃・五番綴二〇冊、外組揃・五番綴二〇冊、習十番・一番綴十冊、九祝舞・一冊、目録（二百拾番謡目録）一冊、独吟之巻・目録一冊と独吟八冊

奥付には「右之本者観世織部大夫／章句真本令版行畢／正徳六丙申歳弥生／皇都二条通御幸町西江入町／山本長兵衛（朱印・鼎印「本家」とあり、全曲書き下ろしの新刻本。徳川氏を憚ったかざし文句が本文に採用されているなど、江戸後期の演能の実態に即した詞章改訂がなされており、刊者が観世大夫家と提携して刊行したと推測される。この本が昭和初期まで観世流内組謡本の底本であったことも、本書が半ば家元公認本であったことを示すか。ただし、内容は明和改正謡本（展示26）の改訂をふまえている点などから、実際の刊行は、明和改正謡本が廃止された安永三年以後であることが確実視されている。

十五世観世大夫元章による改訂謡本。内・外二百番、習十番（以上、紺色菊牡丹唐草模様表紙）、二百十番謡目録、九祝舞（以上紺色文様入七宝繫表紙）各一冊、独吟（九冊・紺色分銅繫ぎに宝尽くし表紙）がその全容。内・外・習に分類した全二百十番の曲目は復活させた古曲を含む独特の選定で、ほとんどの曲の文句を改訂、節付法を工夫して詳細な直しを加え、発音通りの振り仮名を施すなど、国学全盛の風潮をも反映している。この大胆な改訂は総じて不評で、元章没後すぐに廃止されたため、わずか九年足らずの実施

寛政十一年刊宝生流謡本 五番綴、大本

で終わった。内組・外組は、特製本らしい朱色表紙の一番綴本なども含め数々の装幀で刊行されたが、総じて美麗で、本書は中程度の上製本と思われる。刊者の出雲寺和泉掾は、幕府の御用書肆。明和本が幕府後援下の刊行だったため同店が起用されたらしい。

寛政十一年、十四代宝生大夫英勝が監修、校閲に關与した、宝生流最初の刊本。「製本所」堀野屋と足利屋から出版された奥付を有するが、英勝が能の指南役を勤めた十一代將軍家齊の後見である一橋家が出版の援助を行ったと考えられている。版下は一橋家の右筆信夫頭祖の書。信夫頭祖の筆跡については展示28『網代草紙』参照。展示は製本所の奥付を欠く後刷本。

信夫頭祖自筆『網代草紙』 一冊

寛政十二年四月自序。和歌の初学者のための手引書。宮中の行事や神楽・催馬楽などの用語解説のほか、枕詞の用例を五十音順に記す。著者の信夫頭祖は一橋徳川家の家臣（役職は物頭）。能筆で知られ、展示27の寛政十一年刊宝生流謡本のほか、文化七年刊「歌仙絵抄」、文政七年刊「奇魂」序の版下を執筆している。古典研究にも熱心で、村田春海の「万葉集略解」編纂に協力したほか、賀茂真淵の「落窪物語」

（参考展示）文化七年刊舞囃謡附仕舞謡 大本、全五冊

の講釈に自注を加えた「おちくほ物語注釈」二巻を刊行している。頭祖の著述には、他に現存しないが、「紫式部考」「国史実録考」の考証書のほか、歌集「槐軒集」などもあり、本資料は頭祖と和歌との関わりを示す資料の一つ。裏表紙見返しに後人による次のような奥書がある。「此あしる草紙ハ源の頭祖のうし頭はせる草稿にて、刻なり終ぬるにミまかり給ひぬ。此稿、かのうしの書おける也。一わたりの稿にやとおもひ侍る所々も侍りぬ」。

第一冊〜第四冊が「舞囃謡」、第五冊のみ「仕舞謡」で、五冊一揃の本。第五冊巻末に「右宝生流舞囃謡百拾四番仕舞謡式拾九番使大夫將監英勝章句之者今上梓以為府藏文化七年六月」とあり、刊者名はないが、宝生大夫を後援した一橋徳川家の私家版。「舞囃謡」四冊は、同年一月に宝生大夫が刊行した『囃謡』の上巻と同内容で曲順も一致、版下もこの本によつて書かれたものか。また、本文には、目録末に「●印ヨリモ囃ニ仕候」「△印の処仕舞に仕候」と説明する●や△印も付され、仕舞謡をも兼ねている。第五冊は第四冊までに収められていない仕舞謡二十九番を所収。

当センター蔵本は、橋文庫蔵の退紅色金砂子五雲模様布目表紙（金銀刷毛目題箋）のものと、水浅黄表紙との二種類とともに美濃版。特製本と並製本と見られるが、『鴻山文庫本の研究』に記す装幀とは異なる別装本。刊行部数自体は多くないが、かなり多様な表装を施されたことが窺える。

屋代弘賢自筆跋文を付した弘賢刊行の新作謡版本。江戸時代を通じて各地の名所や寺社縁起を元にした新作謡本が少なからず出版された。その多くは観世流の節付であるが、『妙龍水』は宝生流による節付である点が珍しい。享保七年江戸板木屋長四郎刊の同名謡本奥付によれば、作者は空山知雄和尚(『古今謡曲解題』)。弘賢は国学者で部類の蔵書家。著作に『古今要覧考』ほか多数。

安永五年に戸倉屋喜兵衛・須原屋茂兵衛が刊行した謡本。五番綴半紙本。戸倉屋・須原屋は江戸日本橋の書肆。奥付に、宝永初年刊行の下掛り謡本の版木を明和の大火で消失し、今新たに「専門之佳本」をもって改正を加え、謡本を新刻した由を記す。喜多流の名は明記されていないが、三角形のゴマ譜を用いるなど、喜多流の節の特徴が顕著。本文もまた江戸初期の喜多流の写本とほぼ一致し、喜多流最初の公認本として出版された謡本であると考えられている。この外組にあたる刊本が文化三年須原屋刊本であるが、この奥付には喜多健忘斎の識語がある。大夫の識語を掲載した家元公認本は江戸期の下掛り版本では本書のみである。

金剛流最初の版行謡本。本文は金剛流独自の詞章で、この時期にはまだ他本に見られない直シ入り。既刊の下掛り謡本にない版面で美濃版ながら片面六行。第一冊「明治十五年八月 金剛氏成識／門生平瀬春枝書」と署名した漢文体の序文があり、刊行のいきさつと、本書を定本とする由を云う。金剛氏成(右近唯一)は在京の家元、平瀬春枝は後に大阪の能謡界の恩人と云われた平瀬亀之助露香。末冊のみ奥付があり、「明治十五年十一月十一日御届／同 同年十二月出版(定価金五円)」の年記と、編集人故金剛右近、相続人金剛氏成、校正人高村信道、出版人山岸弥平の住所氏名を列記する。故金剛右近は十九世右近氏但(文化元年没)、その頃に金剛流の詞章が整備されたための借名か。高村信道は、京都在住の金剛流役者、野村家禎之助の高弟で、当時の大阪金剛流の中心人物。家元につぐ勢力を持つ野村派と関西の富豪の後援によつて関西で発行された本であった。

金春流最初の揃本。全二十六冊、百三十番。著作者金春七郎、発行兼印刷者江島伊兵衛、発行所椀屋謡曲書肆。松模様浮出し紺表紙(鴻山文庫など多くは茶表紙)で、片面七行、間拍子、直し入り。版式は六徳本(展示25)を範としたらしく、第一冊冒頭の曲譜凡例も似ており、間拍子も六

徳本に倣って「内ヤヲハ」の類を併用している。
江戸前期に刊行された車屋本・擬車屋本・六徳本などの下掛り版本はいずれも金春流節付ではあったが、金春流は江戸後期も定まる正本を持たなかった。本書は、家元金春広成の有力な弟子で同流の強力な後援者でもあった貴族院議員森山茂が校訂をし、版下(本文・節付けとも)の筆をとった本。発行をめぐる事情は、第一冊末の序(「明治四十一年八月 桐蔭森山茂誌」の署名あり)や最終冊末の跋文に詳細に述べられている。

大正四年十月大阪精華堂書店刊謡本

(五軒屋素謡宗家 田中基次刊謡本)

五番綴 袖珍本

高砂巻の奥付「大正四年四月五日印刷 大正四年四月十日発行 大正四年十月十日完成／章句者 故人 観世織部／増補訂正者 五軒家素謡宗家 田中基次／増補訂正者 津田誠堂／筆者 椎木千波／発行兼印刷者 大阪市南区安堂寺橋通四丁目六十番地 又間安次郎／発行所 大阪市南区心斎橋安堂寺町西入 東京史神田区夢町一丁目十五番 精華堂書店」印刷・発行・完成の年記の後、「素謡宗家版不許複製」の黒印を印刷。一丁表に「観世素謡」と刷り、裏には五曲の梗概を掲載。本書は、一見、大正四年四月同所刊の一番綴半紙本をそのまま縮刷したかにみえるが別版で、一部を訂正し全文を改めた上で縮刷している。奥付には「完成日」の一行が加わり、「素謡宗家」の印がなくなる。『鴻山文庫

本の研究』に拠れば、半紙本は、天保十一年山長刊本に基づいて書き改め、直しを詳しくして内題下に季節や役名を記すなどの新工夫を加えて石版刷で刊行した本だが、「改訂本や檜本に比べて読みにくく、さほど新味はない」。田中基次は、明治中期に京都の観世流職分だった田中基春の後嗣。「五軒家素謡宗家」を名乗った資料として貴重。

大正十三年観世流改訂謡本刊行会刊観世流改訂謡本

五番綴、半紙本

浪模様浮き出し観世水模様入青色表紙、横型題簽、長形外題。新書体で片面七行、直し入。展示は大正十三年版(本文は大正版第四版の忠実な模写だが、前付の末尾に新たに装束付けを加え、前付全体を活字印刷に改めている)。明治四十一年に文人の丸岡桂が、観世鍔之丞の弟、観世清之(梅若実の養子となり、後に梅若を離れて独立した)と提携して企画発行した本。本文・節付を読みやすく改め、直しを詳細にするなど、従来の謡本に改革をもたらしたとされる。当時、観世流謡本はさまざまな書店から各種発行されていたが、本書が出るに至って、家元校訂謡本の独占発行契約を結んでいた檜書店との版權争いはついに訴訟まで発展した。

昭和二十八年梅若流謡本刊行会刊梅若流謡本

一番綴、半紙本

記されている。大阪と京都の在住者が多いが、広島、岡山、長崎などの遠隔地在住者も若干名含まれている。

大正十年に観世元滋(後の左近)に破門された梅若流を立てた梅若六郎は、観世流改訂謡本刊行会の協力を得て、自流の謡本(五番綴、半紙本)として昭和六年から四年間かけて刊行した。以後、後刷の一番綴本や、書型や一冊の番数を変えた本が何度か発行されている。展示の「高砂」は昭和二十八年に発行された後刷りの一番綴稽古本。奥付に「著作 梅若六郎／発行者 丸岡大二／発行所 能楽書林 梅若流謡本刊行会」とある。しかし、昭和二十九年に梅若派が観世流に復帰した後は、「梅若謡本刊行会」と改称し、書名もからも「流」の字を外している(展示の「山姥」奥付参照)。

☆なお、今年度第二回(第十二回)フォーラム時には、一部展示替えを行います。

38

『和楽山謡曲寺観世音参詣独案内』

一卷

刊年不明。私家版。「耕園庭山桂尺斎前後書」と署名。謡の習得の階梯を寺社参詣案内の形を借りて視覚化したもの。「小謡の浜」を始発とし、服部観世音菩薩を本尊とする秦河勝建立の和楽山謡曲寺という架空の寺への参詣案内の体裁をとる謡道精進の図である。

39

「素人謡曲家投票番附」一枚

明治三十三年七月二十日に大阪毎日新聞社が新聞の附録として刷った謡愛好家の人気投票番付。流儀と住所が各々

【解題執筆】(敬称略)

伊藤正義・大谷節子・宮本圭造・大山範子

【資料所蔵先】

- ・ 1 ～ 7
 - ・ 12
 - ・ 14
 - ・ 19
 - ・ 21
 - ・ 22
 - ・ 24
 - ・ 27
 - ・ 35
 - ・ 38
 - ・ 39 (個人蔵)
- (内、16・22・25・33・35は古典芸能研究センター寄託)
- ・ 8
 - ・ 10
 - ・ 13
 - ・ 20
 - ・ 23
 - ・ 25
 - ・ 26
 - ・ 36
 - ・ 37
- (神戸女子大学古典芸能研究センター蔵)
- ・ 11 (神戸女子大学図書館蔵)

【参考文献】

- ・ 表 章 『鴻山文庫本の研究 ― 謡本の部 ―』
(一九六五年、わんや書店)
- ・ 法政大学能楽研究所編 『鴻山文庫蔵能楽資料解題』上
(一九九〇年、野上記念法政大学能楽研究所)
- ・ 伊藤正義校注 新潮日本古典集成『謡曲集』上
(一九八三年、新潮社)
- ・ 早稲田大学演劇博物館編
『早稲田大学演劇博物館所蔵特別資料目録5 貴重書 能・狂言篇』
(一九九七年、早稲田大学演劇博物館)
- ・ MOA美術館 特別展図録
『特別展 光悦と能 ― 華麗なる謡本の世界 ―』
(一九九九年、MOA美術館)